尋源館（旧本館）「塔」の謎

三島由紀夫の小説『金閣寺』に、「本館は古い沈鬱（ちんうつ）な赤煉瓦の二階建である。玄関の屋根の頂きに、青銅の櫓（やぐら）がそそり立っているが、鐘楼（しょうろう）にしては鐘が見えず、時計台にしては時計がない」と描写される尋源館（旧本館）の「塔」。岡田一也さん（二〇〇九年 文学部人文情報学科卒業）が卒業論文に尋源館を取り上げ、その「塔」の謎に迫りました。はたして調査・研究の結果、「塔」の意味する真相はどのように明らかになったのでしょうか。この卒業論文の副査をつとめた、本誌編集委員の采睪晃講師にインタビューをしていただきました。

設立当初の尋源館（旧本館）
1981年2月撮影

―尋源館を取り上げた動機を教えて下さい。

私は近代建築に興味をもっていて、大谷大学の中でも、大変美しい建物である尋源館に心惹かれていました。私が入学したときから尋源館の設計者も塔の由来もよく分からないと聞いていましたので、ぜひ明らかにしてみたいと思っていました。つまり、四年間暖め続けたテーマだということになります。

頂塔（ランタン）に込められた願いを語る岡田一也さん

尋源館は、正門（当時は尋源館の南側）から見たときに威厳を感じさせるように配慮がされていました。また、『京都日出新聞』（現『京都新聞』）という一般紙に、建築予定である本館の設計図が大きく掲載されるほどに、社会から高い関心が寄せられていました。当時大谷大学をこの地に迎えるということは大事件で、尋源館はその大谷大学の象徴でした。

―ところが、その尋源館の設計者や「塔」の意味が謎のままでしたね。

なかなか大変でした。本来ならば、設計者と施工者が設計図に記されているのですが、大学に保管されている設計図にも、棟札にも誰が設計者なのか書いていません。尋源館のことを少しでも明らかにしようと多くの人にインタビューしている中で、村松法文先生から「奈良女子大学にも、尋源館と同じような塔がある」と教えて頂きました。そして実際に、奈良女子大学記念館（旧奈良女子高等師範学校本館、〈重要文化財〉）の設計図を見ますと、尋源館の設計図にあるのと同じ松任外次郎の捺印があることを確認しました。そこから、この松任氏を中心として尋源館が設計されたことが分かりました。

奈良女子大学記念館にも尋源館のものとよく似た塔が設置されているのですが、奈良女子大学はこの塔を「頂塔（ランタン）」と紹介しています。そこから、尋源館の塔もランタン（角灯、提灯）として設置されたことが分かりました。

―大谷大学にとってどんな意味をもつのでしょう？

時計塔や鐘楼といった実用的なものではなくランタンであるというのは、大谷大学にとっては重要な意味をもっているように思います。時計や鐘は、時刻という外的なものに人びとを従わせようとするものですが、ランタンは違った性格のものです。ランタンは、照らしはしますが、何かを強制しようとするものではありません。役に立つ人材を育てることが大学に求められていた中で、役に立つかどうかよりも、真理を自ら探求していく智慧をもつ人間を育てたいという願いが、具現化されているのではないかと思います。

聞き手・采睪 晃講師

―なるほど。現在の尋源館は、単なる記念館ではなく、実際に授業が行われる教室になっています。ここで授業を受けている学生さんにもそういった思いを受け継いでいってもらいたいですね。

そうですね。現在の尋源館は、大規模な改修が施されていて、個人的には残念に思う部分もあります。でも、現在も実際に教室として使用されていることには、歴史的建築資料としての価値とは違った意味があるのだと思います。

（岡田さんの論文はホームページ「無盡燈」（http://www.mujinto-otani.org/）でご覧いただけます）